



Title	台湾閩南語における日本語に対する意識調査
Author(s)	呉, 素汝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 55-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77083
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

台湾閩南語における日本語に対する意識調査

呉 素汝

1. はじめに

台湾旅行を経験したことがある人なら、台湾人の生活に日本文化が浸透し、さらに日本語の語彙、例えば「おばさん」「オートバイ」「あっさり」「案内」などが日常会話に使用されていることに気づくであろう。確かに 1990 年代半ばに若年層を中心とした「日本ブーム」が起これ、日本語はこれまで「台湾において英語に次いで人気がある第二外国語であり、学習者数も英語に次いで多い」(張 2020, p.69)し、また、台湾と日本の間では近年、さまざまな交流が推進されている。そのような中で、日本語の語彙は台湾社会に流入してきた。

また、周知のように、台湾は 1895 年から 1945 年までの半世紀の長きにわたって日本の植民地として統治された。日本の統治下、日本語は「国語」として日本語教育が行われていた。特に 1937 年の日中戦争勃発以降、皇民化運動が急激に展開され、学校教育における漢文科の授業と新聞・雑誌の漢文欄が廃止され、家庭内でも「国語常用運動」が推進された(伊藤 2001, p.126; 藤井(宮西)2003, p.147; 岡本 2014, pp.3-4)。さらに、1940 年に入ると、皇民塾や国語動員奉公班のような国語学習施設が続々と設けられ、国語普及の再強化が図られた(陳 2006, p.84)。その結果、日本語は当時、台湾の各エスニックグループ(原住民族、閩南人、客家人)間の共通語となった。それだけでなく、上記のエスニックグループ独自の言語は日本語との長年の言語接触によって、日本語から借用語を大量に取り入れていた。前掲した日本語の語彙はまさに閩南語の中に吸収されて、今なお使用されているものである。

一方で、そもそも台湾の人々はそれらの語彙が日本語から借用したものであることを知っているのだろうか。もし知っているならば、どのようにして知ったのだろうか。また、それらの語彙をどのように捉えているのだろうか。閩南語の中に存在するこのような日本語に対する意識に注目した研究はほとんどない。上記の疑問に答えるために、筆者は 2020 年 6 月 19 日から 20 日の二日間に予備調査を行った。本稿はその結果について報告するものである。

2. 先行研究

閩南語の中に存在する日本語の語彙はどのようなものがあるかについては、これまで多く研究されてきた(村上 1979、陳 2004、山口 2008、田中 2010、荒井他 2013 など)。結果、借用語の形態については、次のようにまとめられる¹。

¹ 閩南語の発音記号と文字の表記は、iTaigi 愛台語(<https://itaigi.tw/k>)及び教育部臺灣閩南語常用詞辭典(https://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/)も参考にした(最終閲覧日 2020 年 6 月 20 日)。

(1) 日本語の漢字表記を用い、読み方は閩南語読みのもの

・注文/tsù-bûn/ ・出張/tshut-tiunn/ ・便所/piān-sóo/

(2) 日本語の漢字表記を台湾華語²の漢字表記に切り替えるもの

・弁当⇒ 便當/piān-tong/ ・寿司⇒ 壽司/sú-sih/

(3) 日本語の発音を借用し、音訳(当て字)したもの

・哇沙米/ua-sá-bih/ (わさび) ・沙西米/sa-sí-mih/ (さしみ)

(4) 意味の縮小・ずれ

① 歐巴桑/oo-bá-sán/ (おばさん) : 中年以上のよその女性を親しんで呼ぶ言葉

② 阿莎力/át-sá-lih/ (あっさり) : 人の性格の比喻。気風がよいこと

(5) 音声・音韻のゆれ : 閩南語の音韻系統に統合

① 日本語/d/ /r/ が /l/ に転移 : /la-jí-oooh/ (ラジオ) ・ /loo-lái-bà/ (ドライバー)

② 長音の脱落 : /lài-ta/ (ライター) ・ /bì-lù/ (ビール)

③ 末尾から二番目だけ高いアクセント型のもの : 案内/àn-nāi/ ・ サービス/sá-bi-sù/

(6) 造語

・和語「あたま」+外来語「コンクリート」⇒ /ā-tá-ma-khōng-ku-lí/ : 融通きかない、頭が悪い

・和語「気持ち」+閩南語/bái/ ⇒ /khī-mō-bai/ : 不愉快、心地が悪い

このように、閩南語の中に取り入られている日本語の語彙は台湾に定着し、使われている。ただし、上記の(4)～(6)からわかるように、閩南語における日本語からの借用語は原語である日本語とは意味や音声音韻において差異が生じている。さらに、新たに造られた語もある。こういった言語現象は、日本語からの借用語が台湾で「現地化」していることの表れではないかと考えられる。

他方、本稿の焦点は、閩南語における日本語に対する意識である。これまでにこのような日本語に対する意識についての調査はほとんど行われておらず、挙げられるとすれば陳(2004)のみである。陳(2004)は閩南語に入った日本語からの借用語について、音声や形態の変容を検討した上で、1998年8月に台南県の住民を中心に行ったアンケート調査データを用い、日本語からの借用語彙85語の使用頻度および使用者の意識を考察したものである。その結果、借用語の普及度については年齢層が下がるにつれその使用が減少しつつあり、また、日本語からの借

² 台湾華語とは、台湾で使われている中国語を指す。その漢字表記は繁体字である。

用であるとの認識が低下することが明らかになった。台湾人の閩南語における日本語の借用語に対する意識調査において、この研究は一定の成果をあげたと言える。ただし、陳(2004)では使用者の意識に関する質問項目が「この単語は日本語から借用した単語であることを知っていますか」というもののみである。繰り返しになるが、本稿は閩南語における日本語がどのように捉えられているのかについても調査する。そこで、前掲した陳(2004)での質問項目のほか、その語彙を閩南語または、日本語であると思うかのような質問項目を加えて、回答してもらった。

3. 調査概要

調査は2020年6月19日から20日の二日間に、SNSにおいて提示した質問項目を回答してもらう形で実施した。調査協力者(以下、協力者)は6名であり、全員1980年代生まれである。そして、調査対象者の6名全員が、テレビドラマ等を通して日本語に触れた経験があり、さらに日本語学習の経験がある。

具体的な質問項目は次のようなものである。また、必要に応じて質問の追加も行った。なお、質問(1)に示した8つの調査語彙は陳(2004)、山口(2008)、陳(2011)、荒井他(2013)などから抽出した。

- (1) あなたは次の語彙を閩南語であると思いますか。それとも、日本語であると思いますか。
沙西米 sa-sí-mih (さしみ)、歐巴桑 oo-bá-sán (おばさん)、歐多賣 oo-tóo-bái (オートバイ)³
哇沙米 ua-sá-bih (わさび)、拖拉庫 thoo-lá-khuh (トラック)、便當(piān-tong 弁当)、
運將 ùn-tsiàng (運ちゃん)、看板 khâng-páng (看板)
- (2) それらの語彙は日本語から借用したものであることを知っていますか。知っているならば、いつ、どのようにして知りましたか。
- (3) それらの語彙を元々閩南語であると思った人に対する質問：それらの語彙の由来が日本語であると知った後、それらの語彙を依然として閩南語であると思いますか。その理由は何ですか。

4. 調査結果

まず、調査結果を3節に掲げた質問項目(1)、(2)と(3)の順に協力者ごとにまとめ、次いで彼らの閩南語における日本語に対する意識について見ていく。

³ オートバイという語は閩南語において漢字表記を持たない。調査の便宜上、筆者がそれを「歐多賣」で音訳(当て字)し、その後ろに「中文：機車」という解説を入れて示した。「中文：機車」とは、日本語に訳すと「中国語：オートバイ」である。

ア、協力者 A

- (1) 子どもの時にそれらの語彙を閩南語だと認識した。
- (2) 知っている。大きくなってから、日本語を学び始め、友達から聞いた。
- (3) そのような語彙が変形した閩南語であり、閩南語ではないと思わない。

イ、協力者 B

- (1) 子どもの時にそれらの語彙を閩南語だと認識した。
- (2) 英語と日本語を学んでから、日常生活に外来語が溢れていることに気づき、いろんな外来語に触れたあと、知った。英語からの外来語が大部分を占めるのだろう。その次は日本語からの外来語であり、特に音訳されているものが最も多い。
- (3) 多くの語彙がすでに台湾社会に溶け込んでいるので、どの語彙が日本語でどの語彙が閩南語であるか、その境界線を引くことが難しい。

ウ、協力者 C

- (1) 外来語。中学校以前はそれらの語彙を閩南語だと思った。
- (2) 中学校の先生から教えてもらった。また、インターネットを通して知った。
- (3) 閩南語だと思う。いわゆる外来語が現地化した。

エ、協力者 D

- (1) 閩南語。
- (2) 日本語を学んでいる時に、気づいた。ただし、ある語彙の発音がすでに閩南語化している。その概念はいわば、日本語の中の外来語・カタカナである。例えば、milk＝miruku。
- (3) そのような語彙が閩南語の一部として内在化された。

オ、協力者 E

- (1) 閩南語。
- (2) 日本語を学んだあと、そのような語彙が外来語であることを知った。
- (3) それらを閩南語の一部として考える。閩南語は私の母語だ。小さい頃から閩南語として身につけたので、そう考えるのが当たり前である。

カ、協力者 F

- (1) 歐多賣、便當、運將と看板の4つの語彙が閩南語だと思う。それ以外の語彙(沙西米、歐巴桑、哇沙米、拖拉庫)が日本語だと思う。
- (2) 子どもの時からずっと日本のテレビ番組やアニメを見たりしている。それを通して知った。
- (3) 閩南語だと思う語彙について、日本語の発音とズレているので、その由来が日本語だと

知っても、閩南語として考える。多くの日本語から取り入れた語彙がすでに現地化した。ただし、そのような語彙に対する認識度が低く、生活にもあまり使わないのであれば、日本語学習の経験により、現地化した閩南語を日本語として考える。

全体的な回答をみると、3節で示した8つの調査語彙について、それを閩南語であると思うと回答した者は5名(内、1名が外来語とも思うと回答)であり、半分が閩南語で半分が日本語であると思うと回答した者は1名であることがわかる。また、それらの語彙が日本語から借用したものであることを知らないと回答した者は一人もいない。すなわち、協力者6名全員がそれらの語彙は日本語由来の語彙であると認識している。また、6名の中で5名がそのようなことを知ったきっかけは日本語に触れ始めたことである。このことから、日本語接触経験の有無は閩南語における日本語の存在に対する認識を促進することが推測される。

次に、閩南語の中には日本語由来の語が取り込まれていることを知っていても、依然として日本語からの借用語を閩南語として捉える者は協力者Bを除いた5名である。また、その理由として、日本語からの借用語が閩南語化(現地化)が進んでいるということと、幼少期に日本語からの借用語が母語である閩南語の中に含まれたまま獲得されたということが挙げられる。そして、前者の理由にも関わるが、多くの日本語由来の語が台湾社会に溶け込んで定着していることで、協力者Bがそのような語彙と閩南語との間に明確な境界線を引くことができなかった。これらのことから考えられるのは、閩南語における日本語そのものが日本語であるという認識が徐々に薄れていくのである。これは陳(2004)が指摘したこと、すなわちこの単語は日本語から借用した単語であるとの認識が低下するという結果と合致しているのではないと言える。

最後に、協力者Fの回答から特筆すべき2つをあげる。1つは閩南語における日本語そのものを日本語に分類するのか、あるいは、閩南語に分類するのかについて、その借用語の発音が原語の日本語の発音と異なるかどうかによって分類されるケースがある。もう1つは閩南語における日本語の使用頻度、また、その語を知っているかという認識度が、閩南語における日本語そのものの分類に関与する可能性があろう。ただし、この点については、使用者が日本語接触の経験があることを前提しているのである。そうでなければ、日本語の言葉を認識しておらずに、語彙の分類を行うことができないからである。

5. まとめと今後の課題

台湾閩南語の中にはさまざまな日本語からの借用語が生きている。それらの借用語には日本語の漢字を閩南語読みにするものもあれば、日本語の発音を借りて音訳するものもあり、受入れ言語である閩南語へ移転し統合していくものもある。本稿は、台湾の人々はそれらの語彙が日本語から借用したものであることを知っているのか、もし知っているならば、どのようにして知ったのか、また、それらの語彙をどのように捉えているのかという問いに答えるために、閩南語における日本語に対する意識を調査し、その結果を見てきた。本稿で明らかになったことは次のようにまとめられる。

調査語彙 8 語(沙西米、歐巴桑、歐多賣、哇沙米、拖拉庫、便當、運將、看板)について、外来語、日本語として捉えられることがあるが、閩南語として捉えられることがほとんどである。また、上記の語彙が日本語からの借用語であるということを知ったのは日本語接触の経験があるためであることがわかった。さらに、閩南語の中に存在する日本語由来の語が依然として閩南語であると認識されている最も大きな理由は、そのような語彙が閩南語に取り入れられ、閩南語として現地化しているためであることが明らかになった。

本稿では明らかになったこと以外に、今後の課題として浮かび上がったこともある。調査語彙の選定方法を検討し、その使用頻度、また、その語に対する認識度に関する質問項目等を追加した上で、調査対象者数を増やし、結果をより深く分析、考察する必要がある。

主要参考文献

〔日本語文献〕

- 荒井智子、杜岱玲(2013)「台湾にある日本語」『明海日本語』第 18 号増刊, pp.345-353。
- 伊藤潔(2001)『台湾—四百年の歴史と展望—』第 13 版, 中央公論新社(1993 年初版)。
- 岡本輝彦(2014)「戦後台湾における日本語政策—脱日本語から日本語の受容へ—」『別府大学日本語教育研究 別府大学日本語教育研究センター紀要』第 4 号, pp.3-11。
- 張恵蘭(2020)「地域・アジア研究 グローバル化時代における台湾日本語教育の現状と課題」『ふくい地域経済研究』第 30 号, pp.61-72。
- 田中研也(2010)「台湾における日本語借用語アクセント—台湾語の声調から見る場合—」『淡江日本論叢』第 22 号, pp.99-115。
- 陳虹彬(2006)「日本統治下台湾における国語講習所用国語教科書の研究—台湾教育会の『新国語教本』に着目して—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第 54 集第 2 号, pp.63-89。
- 陳麗君(2004)「台湾閩南語における日本語からの借用語」『南台應用日語學報』第 4 号, pp.73-90。
- (2011)「言語接触による言語変化と文法化現象の一例—台湾中国語“有”構文の分析を中心に—」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第 8 号, pp.103-116。
- 藤井(宮西)久美子(2003)『近現代中国における言語政策—文字改革を中心に—』三元社。
- 村上嘉英(1979)「閩南語における日本語語彙の受容様態」『天理大学学報』第 30 巻第 5 号, pp.27-43。

〔中国語文献〕

- 山口要(2008)「台湾閩南語的日語借詞研究」國立中山大學中國文學系碩士論文(台湾の国家図書館所蔵)。